

## ダニエル書にあらわれた歴史哲學 (下)

小田 丙午 郎

### (四) ダニエル書の歴史的世界

ダニエルの生涯はバビロン王ネブカドネザル (Nebuchadnezzar) のエルサレム包圍に始りバビロンの最後の王ベルシャザール (Belshazzar)、メデヤ王ダリヨス (Darius)、ペルシャ王クロス (Cyrus) の異邦諸王への遍歴王事に終始した。これは併し史實と一致しない。例えばバビロン最後の王はベルシャザールではない。それはナボニダス (Nabonidus) であり、ベルシャザールはその子である。ベルシャザールは王ではなかつた。

バビロンとペルシャの間にメデヤと云う國がなかつた。またダリヨスなる王もなかつた。これはペルシャ王ダリヨスの誤であろう。加之ダニエル書の記事例えばネブカデネザルの夢、<sup>註一</sup>ペルシャザールの饗宴の一夜などの史實はヘブル正典は勿論當時の古代東方世界の文獻によつて保證されないと言われている。これ等は當時の古代東方世界の民間の傳説の片鱗をイスラエルの信仰によつて潤色したものではなからうか。

更にダニエル書はネブカデネザルのエルサレム包圍をエホヤキム (Jehoiakim) 王の三年としている。此記列紀略下(二三、三六)はエホヤキムの治世のそれと一致しない。此の一點に就ても亦ダニエル書の史實には依憑され難いものがある。ダニエル書はイスラエル民族の歴史敘述ではない。如何なる角度から見てもそれは所謂編年體的史書ではない。既に述べられた通りダニエルの時代の背景をなすものはアレキサンドロス大王の後繼者の四大王國殊にアンテオケ四世の治下に於けるセレウコス (seleucos) 王朝である。

此はダニエルの對向しそれを克服すべき時代であつた。従つてダニエルの關心は現在にあつたのである。現在への關心と對決、これが歴史意識の端初ではなからうか。

ネブカデネザルとペルシャザールはアンテオケ四世の投影である。彼等の時代はアンテオケ四世の時代を反映している。ここには謂わば現在へ過去が投入されている。文學に於ける現在の過去化である。

黙示文學の研究者の多くはバビロン、メデヤ、ペルシャに就て右の様

に現在の過去化を以ての説明を試みる。正しく彼等は正鵠を得ている。

バビロン、メデヤ、ペルシャに就て語るダニエルは彼の最後の對向を餘儀なくされているヘレニズム王朝に關しては之を明示せず異象化している。それは何故であらうか。

イスラエルに於ては時代を語る事に國を語る事を意味し、更に國を語る事は國王其人の在り方を審く事に外ならなかつた。彼等はヘレニズム王朝を語るべくイスラエルの壓迫者アンテオケ四世に言及を避ける事が出来なかつたであらう。ダニエルは斯る環境に在つて斯る道を選んだのは右の様な事情に於てであつた。

歴史に於ては過去は現在化される。例えばブルックハルトの伊太利の文藝復興期に於けるルネッサンス觀はブルックハルトの時代意識ルネッサンスが投射されている如くに。

ダニエルはこれに反し上に述べた通り現在を過去化している。

以上の如くバビロン、メデヤ、ペルシャはヘレニズム王朝の過去化された彼の立つている時代的環境である。併しこれは單にここに留らない。

バビロン捕囚以來イスラエルはメシヤを待望し、そうして選民恢復を期待した。

バビロンに代つてペルシャが統治した事は既に述べられた。併し彼等の夢は實現を見なかつた。ここに彼等は<sup>註三</sup>エズラ(Ezra)、<sup>註四</sup>ネヘミヤ(Nehemiah)による律法へ復歸エルサレム神殿造營と復古運動が行われた。斯る間にイスラエルは被治者として支配王國に對する客觀的觀照がなされなかつたであらうか。筆者はイスラエル民族の世界像に觸れて見よう。

ダニエル書にあらわれた歴史哲學(下)

これがなされるために先づ人はイスラエル民族の對異邦精神に言及するのが順序である。

イスラエルの對異邦精神はこの神觀と共に變移した。ヤーウエが單なる部族神的性格に留つていた時は彼等の異邦人に對する精神は憎惡そのものであつた。

今ゆきてアマレクを撃ち其有る物をことごとく滅しつくして彼らを憐むなかれ、男女童稚哺乳兒牛羊駱駝驢馬を皆ころせ(サムエル前書一五・三)

これは民族としての敵愾心の極致を示しているものと云えよう。バビロン捕囚下にある對異邦精神が如實に描寫されたものは詩篇百三十七にあらわれている。

なんぢの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは幸福なるべし。

併し他面ヤーウエ神觀の聖化に伴つて對異邦精神も亦展開を見るに至つている。第一イザヤに於てはアッスリヤはヤーウエの筈としてイスラエルを懲すものであつた。(イザヤ書一〇・二四)

エレミヤはバビロンへの降服を同胞に勸告した。エレミヤが何故バビロンへの降服を勸告したかに就て種々なる考察が加えられて來た。併し此等の考察は主としてエレミヤ信仰の究明を意圖したものである。思うに當時イスラエルは結局滅亡は免れなかつた。滅亡の結果はその隸屬國として選ぶべきものはバビロンかエヂプトより外にあり得なかつたろう。エレミヤによればバビロンはエジプトに多くの點に於て優る所があつたと洞察したのではなかつたらうか。

<sup>註六</sup>ダニエルはネブカデネザルの暴君的性格を摘記している。かかる暴君的性格のネブカデネザルは併し他面天真瀟灑たる野人として前非に悔い

るに咨かてなかつた。

<sup>註六</sup>メデヤ王グリヨスはダニエルを拔擢した。

彼はグリヨスの姦悪な側近者に對する憎惡を抱きながらグリヨス其人には好感を示している。

偏見のない視野博大な精神——これが世界史觀の根柢をなすものではなからうか。

斯く考える時、イスラエルは世界史的視野に立つた古代東方の選ばれたる民族ではなかつたらうか。

バビロン、メデヤ、ペルシャ、ギリシャ——此の四つの國と四つの時代はダニエルの歴史像ではなからうか。

因に舊約聖書には世界史的視野に立つものと民族的城壁に籠るものと二つの對流が交つている。一例を挙げれば<sup>註七</sup>ルツ記第三<sup>註八</sup>イザヤ書が前者にエステル書エズラ、ネヘミヤ記が後者に屬する類型である。

註一、ダニエル書、五章

註二、エズラ書。これはヘブル原典。ギリシヤ語譯によれば第二エズラ書。

註三、ヘブル原典七十人譯、共にエズラ書の一部。

註四、イザヤ書五十三章。

### (五) ダニエル書の歴史觀

ダニエル書の歴史的世界としてバビロン、メデヤ、ペルシャ、ギリシヤの四つを描く事は失當ではないであらう。一方筆者はダニエル書がこれに就て語るものとして左にその一部を抄録して見よう。これはネブカデネザルの夢の内容である。

王よ汝は一箇の巨なる像の汝の前に立てるを見たまへり。其像は大きくしてその光輝は常ならず。この形は畏ろしくあり、其像は頭は純金胸と兩腕とは銀腹と腿とは銅腿は鐵脚は一分は鐵一分は泥土なり汝見て居たまひしに遂に一箇の石人手によらずして撃れて出でその像の鐵と泥土との脚を撃てこれを碎けり、斯りしかばその鐵と泥と銅と銀と金とは皆ともに碎けて夏の禾場の糠のごとくに成り風に吹はらはれて止るところ無かりき而してその像を撃たる石は大なる山となりて全地に充り。(ダニエル書二、三一、三五)

これに次いでダニエルの夢の解明が始る。

金銀銅鐵の國と時代は具體的には彼が言及しない。他面金銀銅鐵とに對應して四つの獸が擧げられている。獅子、熊、豹、等の角の獸、金銀銅鐵に代つたものは石であつた。獅子、熊、豹、等の角の獸に代つたものは日の老いたる者であつた。

これは第七章に記されている。

ダニエル書の異象はこれに盡きない。併しダニエルの歴史觀の核心は右の金銀、銅、鐵、獅子、熊、豹等の角の獸に求められて誤らないであらう。

金銀銅鐵によつて隱喩されるものは何か。

これに就て最初の解明を試みたものはシビルの託宣(Sibylline Oracles)である。

これによれば金はバビロンを銀はメデヤを銅はペルシャをさうして鐵はギリシヤを隱喩したものと解明された。

ギリシヤの滅亡には併し直ちにメシヤ王國の樹立が續かなかつた。

ここに於て銀をメデヤ、ペルシャ、銅をギリシヤ、鐵をローマとする解釋が起つた。

それは第四エズラ書である。

マルコ傳(十三、一四) ヨハネ黙示録(一一三、一一六) はいずれも此の解釋に従つてゐる。

ダニエル書が教會の教義として取扱われるならば第四エズラ書の立場も諒とされるであろう。ダニエル書が史料として扱われる限りシビルの託宣が首肯されるべきではなからうか。

バビロンの金、メデヤの銀、ペルシャの銅、ギリシャの鐵、此等の四つの時代と四つの國の斯る系列が附與されたダニエルの史觀の根柢にあつたものは何であつたらうか。

これはアリストテレスの如き政體の批判であらうか。歴代史略列王紀略の如き王者の評價であらうか。近代の文化類型による區分であらうか。またマルクス主義史觀の生産様式による分類であらうか。少なくともダニエル書の中からはそれへの答が得られない。一方斯る見地から古代東方の文化史の究明しようとする意圖が同書に刺戟されて前世紀に試みられた。併しいずれもみな所期の目的に遠くなかつた。

これは恐らくイスラエル民族の傳統的信仰の「我汝を大なる國民と成し汝を祝し汝を大ならしめん汝は福祉の基となるべく、我は汝を祝する者を祝し汝を詛ふものを詛わん」(創世記一二、二)による異邦の對イスラエル政策に原因せしめたものではあるまいか。

バビロン捕囚下のイスラエルは異邦の被壓に服さなければならなかつた。その被壓はイスラエルには臥薪嘗膽の苦杯を味わせた事は察するに難くない。併しバビロンの對イスラエル政策は詩篇百三十に表われた様に殘忍の極致を盡したものと見るのは聊か早計である。<sup>註二</sup>エゼキエルは

ダニエル書にあらわれた歴史哲學(下)

捕囚の預言者である。エゼキエル書によればかかる捕囚下に於てイスラエルの民の信仰の自由は許され、そうしてイスラエルの生活は保護を加えられている。

ペルシャの王クロスの對イスラエル政策が寛容であつた事は既に觸れた如く彼はヤウエの受膏者の名に於て呼ばれている事實によつても察知される。對イスラエル政策の苛酷はヘレニズム王朝のセレウコス家のアンテオケ四世に於て其の絶頂に達した。

イスラムが西歐を席捲した。これはアレキサンダーの東方征服に對する反撃であるとも云われる。アレキサンダーの東方侵略の一面がここに窺われる。

ヘレニズム時代はローマ帝國前の世界王國と考えられて來た。またそう考えられるであろう。これは併し西洋史家の立場からなされた結論ではあるまいか。ローマ帝國の世界性は何人にも承認されるであろう。これは依し其儘ヘレニズムの場合であり得るであろうか。世界とは一體何であらうか。それは人類なる普遍原理に民族なる特殊性が呼應相即する完結體ではなからうか。

ダニエルによればヘレニズムは絶對に斯るものではなかつた。それは統一ではなく分裂であつた。そうして自由ではなく強壓であつた。

そこにはギリシャなる普遍に東方民族の特殊性が一色化されたのであつた。

<sup>註四</sup>人はヘレニズムの特色を東方の西方化西方の東方化と呼ぶのを常とした。ダニエル書によれば、併しヘレニズム時代は東方の西方化に一偏していた。

そうして若し古代東方に於て世界性を具備した所があればそれはバビロンであつた。

ヨハネ黙示録に於てはバビロンはローマ帝國の異名であつた。そうしてそれは神の審判の對象と目された。

ローマは基督教を迫害した。併し基督教はその傳播の道を提供したのも亦ローマ帝國であつた。即ち基督教はその發生の地エルサレムに育たないでローマ帝國下のヘレニズム世界に結實したのはローマの共和的自由精神の支配した事情によつたものである。註五ローマ書一三章に於てその著者パウロは權威への服従を教えているのは著者がローマ帝國に對する好意の表と見做されるのも一理ある事と言われねばならない。バビロンに就ても亦同じ事が云われるではなからうか。

即ちバビロンのイスラエルに對する在り方は一つはその保護であり他はその壓迫であつた。斯る相互に反撥する二重性格には如何なる角度からの説明がなさるべきであらうか。

バビロン對イスラエルの關係はまたエジプト對イスラエルのそれに類似した。人は出埃及記の記事から埃及のイスラエルへの苛政だけを想像するのは誤であらう。

イスラエルはバビロンの保護を受けた。他面それはバビロンの壓迫を蒙つた。斯くしてイスラエルのバビロンとの分離が行われた。此事はイスラエルの歴史的運命ではないか。

斯る歴史的運命の下に彼等の選民意識であつた。人はイスラエルの選民意識によつてヤールウェとの關係を想到するであらう。併し選民意識は他面異邦世界との交渉關係の居限性と意味しているのではなからうか。

註六 彼等は自ら地上の寄寓者を以て任じたのは此の證左ではあるまいか。バビロンの保護と壓迫との二重性格も亦斯るイスラエルの傳統意識を反映したものとも見ても恐らく大過はないであらう。

ダニエル書も他の舊約の史書例えばサムエル前後書歴代志略(上)列王紀略(上)との對比に於てその揆を一にするものがあるとするればそれは選民史觀であらう。

ダニエル書は併し既掲の歴史書との間に一線が劃されなければならぬ。

ダニエル書にはイスラエル民族の始祖とアブラハムの名が見出されない。イスラエル宗教史上の劃期的出境及が明確に描出されているが併しイスラエルの建國のダビテの名が掲げられない。これは何を意味するのであらうか。

ダニエルによればバビロンの捕囚と共にイスラエルの民族史は終熄しバビロンの捕囚と同時にイスラエルの世界史が始つたのではなかつたか。因にサムエル書はダビテ王の傳記列王紀略はソロモン王と南方ユダと北方イスラエルの歴史、そうして歴代志略は列王紀略に記事内容を依憑しつつ忠實なる歴史敘述を避けて寧ろ著者の信仰の自己主張が強く浮彫にされている。従て歴代志略は史的價值に於てよりも寧ろその教訓的價值に於て評價されている。上に明にされた様に以上の三書はその對象とする所はいずれもイスラエルの王朝であつてイスラエルを繞る異邦ではない。預言者に於てヤールウェ神觀の飛躍と共に世界的視野が擴大された。預言と歴史との關係がここに究明されなければならないであらう。ここでは一事だけに觸れる事に満足しななければならない。

預言者の世界的視野の擴大は併し預言者に世界像を提供したてであろうか。これはその充分論據を發見するに困難である。預言者はその性格に於て史家であるよりは寧ろ詩人ではなかつたてであろうか。

舊約聖書に於て嚴密な意味に於ける歴史觀が樹立されたのはダニエル書に於てであつた。金、銀、銅、鐵、獅子、熊、豹等の角の獸はいずれも價值系列の低落過程を示している。

ギリシャの詩人ヘシオドス(Hesiodos)は五つの時代の擧げた。即ち黄金の時代、銀の時代、青銅の時代、英雄の時代とそうして鐵の時代がそれである。

ヘシオドスの價值系列の圖式をそのまま固守するならばそれは必ずしも向下史觀とは云えないであらう。併し此の圖式系列に含まれる史觀は明に悲觀的な色彩を帯びている。此事からこのヘシオドスの史觀を墮落史觀と呼んでも人は異議を呈しないであらう。

この墮落史觀はダニエルの場合に於ては一層明瞭に圖式化されていると言つて差支がない。人は愚管抄を末法史觀と呼んで來た。それは間違ではない。併しここに一應注意されなければならない事は此の場合の末法史觀は勸善懲惡の見地に立つた實踐的意圖に裏付けられて居る一事である。既に擧げた列王紀略歴史志略は所謂申命記者に影響されイスラエルの興亡の批判をば申命記の遵法如何に準じている。此の意味に於て末法史觀と申命記者との間に多少の類似が存するようと思われる。ダニエルの示す世界史は確に墮落史觀末法史觀の面を有つている。

併しダニエル書は單なる墮落史觀末法史觀に盡きるであらうか。

註一、Montgomery: International Critical Commentary 1937

ダニエル書にあらわれた歴史哲學(下)

註二、エゼキエル書によればバビロンの捕囚者の祖國の同胞への宣教自由が窺はれる。例えば三十七章。

註三、イザヤ書、四十五章一節。

註四、Rudolf Deisman: Licht von Osten 1922

註五、William Sandey:

註六、月命記(二二—二四)

#### (六) ダニエル書に於ける時と永遠

金銀銅鐵の像は倒された。そうしてこれに代つたものは石の山であつた。ダニエルの此の夢の解明は次の様であつた。

この王等の日に天の神一の國を建たまはん是は何時までも滅ぶること無らん。此國は他の民に歸せず却つてこの諸の國を打破りてこれを滅せん是は立ちて永遠にいたらん(ダニエル書二ノ四四)

同じ様に獅子、熊、豹等の角の獸は日の老いたる如きものに殺された。ダニエルは此の異象の解明を「斯て後審判はじまり彼はその權を奪われて終極まで滅び亡ん。而して國と權と天下の國々の勢力とはみな至高者の聖徒たる民に歸せん至高者の國は永遠の國なり諸國の者みな彼に事へかつ順わん」(ダニエル書七、二六)と結んでいる。筆者は先に金銀銅鐵獅子豹等の角の獸の圖式の中に墮落史觀末法史觀なものを指摘した。墮落史觀末法史觀は併しダニエル書の歴史觀の一面である。併しこれはその凡てではない。それは終末史觀の名を以て呼ばれるのが至當であらう。既に述べられたヘシオドス愚管抄の立つところは哲學的内在論であり他面宗教的には内在的汎神論である。反之ダニエル書は哲學的には目的論的超越論であり、宗教的には超越的人格論的である。これはアルトハウス(Althaus)・トネルチ(Trautsch)によつて主張された近代終末論

である。

これは直ちにダニエル書には適用しないであろう。若し筆者の如上の見解が許されるならば金銀銅鐵を以て隱喩された四つの時代は<sup>註四</sup>シュペングラ（Spengler）の思惟する如く時代發展系列の端初として把握さるべきではなく寧ろこれは金銀銅鐵の混合像の部分的構造として説明さるべきではなからうか。

新約聖書のヘブル書の記者は「この末の世には御子によりて我等に語り給へり。神は曾て御子を立てて萬の物の世嗣となしたまひ御子によりて諸般の世界を造り給へり。（ヘブル書一、二）

邦譯聖書に於ける諸般の世界に當る *aiōnais* は空間的世界を示す一方各時代を意味している。そうして舊新約聖書に於ては世界は此處彼處の空間性より昔と今（Formerly and Now and Then）に於て捉えられている。一方ガラテヤ書に於て使徒パウロは「主は我らの父なる神の御意に隨ひて我等を今の惡しき世より救ひ出さんとて己が身を我らの罪のために與へたまへり」（ガラテヤ書一ノ四）と云つてゐるが、此處に惡しき世は來るべき神の國に對比されている事は贅言するまでもない。

ヘブル書の既換の末の世はでは何を指すであろうか。それはその外延として諸々の世を有つものである事は明であろう。

ダニエル書に於ける時代と永遠との關係は以上の如くである。そうしてこれはイスラエルの時代と永遠とに就ての一般信仰ではなかつたか。

<sup>註二</sup>フステル・ドウ・クランヂは古代人は時と永遠との差を生と死とに於て捉えたと主張する。古代人は一般に死後の生命の存續を信じた。これは併し多くの宗教哲學者によつて指摘される様に原始的精靈崇拜

（Animism）にすぎない。神の國或はメシヤ王國は歴史に於ける歴史を通じての神の超越的な救済である。

時代の連續は直ちに神の國の顯現であろうか。永遠は時代と非連續でなければならぬ。ここに神の國到來に先立つて終末的劇曲が演ぜられなければならぬ。

これはイスラエルの預言者によつてヤーウエの日と呼ばれていた。かかる終末的劇曲が具體的に自然現象として期待されて來た。

また天と地に徴證を顯わさん即ち血あり火あり煙の柱あるべし。エホバの大なる畏るべき日の來らん前には日は暗く月は血に變らん。（ヨエル二、三〇）併しダニエルに於ては上に明にした様にアンテオケ四世の空前絶後の大迫害であつた。

これはダニエル書に於ては歴史が自然に優位する事が意味しているのではなからうか。

創世紀の卷頭を飾るものは天地創造の由來である。この事から人が天地創造の信仰をイスラエル民族に於て強調しようとするならば、それは重大な過誤ではあるまいか。

<sup>註四</sup>イスラエル民族に於ては創造は天地に於てではなく歴史に於ける信仰であつた。

彼等のヤーウエ信仰の端初は出埃及の事件と共に始つた事を人は銘記しなければならぬ。因にヤーウエは歴史の神として自然の神エロヒムと區別されて居る事もここに附記しておく。アンテオケ四世下に於ける政治的大異變<sup>カストロイ</sup>を終末的劇曲としてダニエルのヤーウエ信仰の當然の歸結でなければならぬ。

政治的カタストロフィーこれが一切の歴史の精算でありまた審判である。これによつて神の國と地上の國とは一度唯一度否定的に媒介される。ダニエル書によつて代表される凡ての黙示文學には斯るカタストロフィーは必然が過程とされている。

歴史殊に普遍史の中核は何であろうか。此の間は歴史と共に舊くそうして歴史と共に新しい。古代イスラエルはこれをヤウエとその審判と観じた。そうしてその具體的事象は政治に顯現すると考えた。人は政治的事象に歴史の中核を求めようとする。歴史には併し政治的事象に對して精神的事象が存する事は争われぬ所である。政治的カタストロフィーが存した如く精神的カタストロフィーが存しなかつたであろうか。アテネに於けるソクラテスの死はアテネの精神的カタストロフィーではなかつたか。

ソクラテスの死がなかつたらプラトリーの哲學が誕生したであろうか。イスラエルに於て精神的カタストロフィーを求める時、人はナザレのイエスの十字架の死を指すに躊躇しないであろう。當時の爲政者、宗教階級は別として一般民衆にはイエスの死に優さる逆説はあり得なかつた。

イエスの死は併し悲劇に終らなかつた。否それは凱旋に始つた。ここにイエスの死は精神的カストロフィーの意味が應えられて餘あつた。ダニエル書にあらわれた終末は歴史的殊に政治的終末であつた。云い替えればそれは異邦支配の終末であつた。異邦支配に續くものは選民支配である。イスラエルは併し異邦人とその民族的價值系譜を異にしたてあろうか。

ダニエル書にあらわれた歴史哲學(下)

預言者も亦律法記者もこれに對し一樣に否定している。斯く考える時イスラエルの世界支配は直ちに神の國の成就と斷じ得ないであろう。選民支配が神の國の成就と同一を意味するためには選民イスラエルの人間革命が行われなければならぬ。人間革命とは何を意味するであろうか。それは價值觀念の一切の轉倒でなければならぬ。イエスはこれを悔改(*metánoia*)と呼んだ。

*καὶ ἤρξεν ἡ παύσις τοῦ λαοῦ, μετανοεῖτε καὶ μετατρέψετε ἐν τῇ σαρραφίᾳ.*

神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ、マルコ傳二、一五

終末論が基督教神學の中心として論議の對象となつたのは前世紀の末期からであろう。

終末論と終んで神の國の性格が究明されるに至つた。そうして神の國に終末的色彩を讀んだのは人も知るアルバート・シュヴァイツァ(*Albert Schweitzer*)であつた。イエスの宣言による神の國は確にシュヴァイツァの宣言の如く終末論的背景を無視しては理解されぬであろう。

イエスの終末觀は共觀福音書の到る處に窺われる。例えば所謂山上の垂訓の如きもその顯著なる例證である。

ここに貧しきものが富めるものに優つて祝福され世の敗殘者は天國の勝利者としての約束を受ける。

山上の垂訓の多くはイエスの直接の言説であると共にその弟子たちのイエスの人格と精神翻譯ではなからうか。イエスの直接の發言と思われるのは恐らく次の句ではなからうか。

「異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の、民の上に權を執ることは、汝らの知る所なり。然れど汝らの中には然らず、



反つて大ならんと思う者は、汝らの役者となり、頭たらんと思う者は、凡ての者の僕となるべし。人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず。反つて事ふる事をなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與えん爲なり。(マルコ傳一〇、四二、四五)。

ここには異邦的支配理念はイスラエルの奉仕理念へと轉質している。ダニエルに於ては告げられるものは異邦支配の終末であつて異邦理念のそれではない。

因にユダヤ教とキリスト教との分水嶺をなすものは政治史的終末と精史的終末、そして異邦的支配の終末とキリスト的奉仕とするのは失當であらうか。

イエスの公生涯は三年で終つた。イエスがキリストと信ぜられたのは彼の死後に於てであつた。イエスの福音が傳播したのはイスラエルではなかつた。それは小アジア地方であつた。

そうしてその容器に選ばれたのは使徒パウロであつた。彼によつてキリスト教は世界的になつた。パウロは基督教の創始者と呼ばれるのは以上の理由からである。

パウロの出現も亦基督教會史上の劃期的出來事である。

福音は異邦世界に傳播するためには救の普遍性が前提とされなければならぬ。

救の普遍性とは何か。これは人類の平等であらねばならない。人類の平等とは併し他面選民意識の終末を意味するものである。

パウロによつてイスラエルの選民觀念が終止符を打つた。

異邦支配の終末はダニエルに於て、異邦理念はイエスに於て、そうし

て選民意識はパウロに於て、夫々終末を告げたのではなからうか。

註、パウロの異邦人救済はエペソ書三ノ四。

## 結語

第一次世界大戰は歐洲に於て獨り政治上だけでなく精神上のカタストロフィであつた。殊に基督教界に於てはこれを契機に深刻な自己批判が教會とヨーロッパ自體に向けられて來た。

十六世紀の宗教改革以來歐洲キリスト教界に於ては終末觀が忘れられていた。併し此時これは神學の重要部門をなすに至つた。否中心部門となつた。所謂危機神學と呼ばれるバルト、ブルナー(Barth, Brunner)の辯證神學は終末觀を中心に形成されている事はここに斷るまでもない。今ここに辯證神學を語るのは筆者の領域ではない。

ここに其の一般的成立課程を述べればそれは十八世紀の啓蒙主義と十九世紀の獨逸觀念論を支柱とした近代的人本的なシュライエルマッヘル(Schleiermacher)リッテヘル(Ritzel)等の近代自由神學に對する抗議であり、他方それは近代ヨーロッパ文化の基督教による袂別克服である。他面ブレイ(Barry)の進歩の理念(Idea of Progress)やヘーゲル(Hegel)の發展概念が基督教側からの激しい批判の對象となり従つて發展史觀が基督教神學から嚴しい抗議を蒙つて來た。

例えばゴッガルテン(Gogarten)、ニーバー(Niebuhr)、チリック(Tillich)等は夫々異なる角度からの從來の發展史觀への挑戰者である。

第一次世界戰爭は一方ヘーゲル(Hegel)以來のヨーロッパ的一元的世界像を破壊してトインビー(Toinbee)の様に多元的文明像が構成されよ

うとしている。刻下西洋史學は今正に混沌状態に陥つてゐるのではなからうか。西洋文明は一般にギリシャとヘブライの二大潮流に溯源されると云われる。

これは西洋史學に就ても同じ事が云われないであらうか。

所謂基督教的史觀なるものは西洋史學の主潮には入らなかつたであらうか。この系譜を辿る事は現下の西洋史研究に無用の業であらうか。基督教史學の嚆矢をなしたものは何であつたか。

筆者はこれを聖アウグスチヌスの「神の國」と思惟する。併しアウグスチヌスの「神の國」は舊新約聖書を離れては構成されなかつた。

「神の國」以前のキリスト教の歴史哲學は何であつたか。筆者は舊新約聖書に於てはそれをばダニエル書と推定する。

これは筆者の錯誤であらうか。

ダニエル書に関する文献

Charles : A Critical and exegetical on the book Daniel 1929

Gall : Die Einheitlichkeit des Buches Daniel 1895

Welch : Visions of the End.

渡邊善太 舊約聖書の文學。

終末觀に関する文献。

Althaus : Die letzten Dingen

Barth : Dogmatik

歴史哲學に関するもの。

Gogarten : Ich glaube an der Drei-einigen

Niebuhr : Faith and History.

Tillich : The protestant era

Cullmann : Christ and time